

『逢坂越えぬ権中納言』の主人公と『源氏物語』

——「さまよき人もなかりける」をめぐって——

金光桂子

はじめに

一 「さまよき人もなかりける」

二 夕霧巻・総角巻の「さまよし」

三 物語前半部の主人公

四 「さまよき人」薫

おわりに

『逢坂越えぬ権中納言』の後半、主人公が女君に涙ながらに思いを訴える場面における「さまよき人もなかりける」という表現は、主人公を賞賛するものではなく、文字どおり醜態を述べていると解釈すべきである。この表現は、『源氏物語』の同様の場面で夕霧や薫が「さまよく」振る舞っていること、また本物語の前半では主人公が「さまよき人」という印象を与えることとの対照においてなされたものである。『源氏物語』では薫らの「さまよき」態度が女性側から誠意に欠けると受け取られる場合があり、『逢坂越えぬ』は主人公を基本的に「薫型」の男君として造型しつつ、薫以上の魅力があることを、この表現によって述べようとしていると考えられる。

はじめに

『堤中納言物語』中の一編『逢坂越えぬ権中納言』（以下『逢坂越えぬ』と略す）は、天喜三年（一〇五五）五月三日に行われた六条斎院物語合に、小式部という名の女房が提出した物語である。掌編でありながら、成立時期や成立環境が判明している点で、物語史のみならず文化史的にも価値が高い。

物語は大きく前半と後半とに分けられる。冒頭に登場する主人公中納言は、「宮」と呼ばれる女性へのかなわぬ恋に悩んでいる。物語前半では、中納言の姉妹と思われる中宮の御前で行われた菖蒲の根合において、中納言が他を圧して魅力を発散する様が惜しめない賛辞とともに語られる。後半は一転して中納言の不如意な恋を描き、ある夜、宮に接近して涙ながらに訴えるもかいなく、むなしく一夜を明かしたところで物語は幕を閉じる。

『逢坂越えぬ』という題名は、こうした中納言の恋のあり方を象徴しているわけだが、最後の一線を越えられない消極的な主人公の姿は、『源氏物語』の薫を髣髴とさせる。後に述べるように、表現の上でも薫の物語からの影響が指摘されており、平安後期以降の物語でもはやされた「薫型」の男君というとらえ方は、この主人公を論じる上でも

はや常識であろう。また、主人公の人物造型に、物語合を主催した六条斎院祓子内親王の後見人である藤原頼通への意識を読み取る論もある。「限りなく理想的でありながら、恋には難渋する男君」がこの物語のテーマであることは間違いない。

ただしこの物語には、『堤中納言物語』中他の諸篇と同様、本文の乱れや短編ゆえの理解の難しさもあって、本文の解釈に揺れの生じている箇所が少なからず存在する。本稿の表題に掲げた「さまよき人もなかりける」もその一つである。主人公への評価に関わる重要な一節であり、『源氏物語』からの影響についてもいまだ論じ尽くされていない点があると思われるので、以下考察してゆく。

一 「さまよき人もなかりける」

問題となる本文を掲出する。物語後半、宮の御座所まで忍び込んだ中納言が、困惑している宮をなだめつつ、ただ一言の返事を懇願する場面である。

思し惑ひたるさま心苦しければ、「身のほど知らず、なめげには、よも御覧ぜられじ。ただ一声を」と言ひもやらず、涙のこぼるるさまぞ、さまよき人もなかりける。（四四〇頁）

傍線部「さまよき人もなかりける」について、諸注釈書

を繙くと、古くは、「これ以上の美しい人はまたとあるまいと見受けられた」（清水泰『増訂堤中納言物語評釈』）、「こんな様子のよい人つてないと思われた」（佐伯梅友・藤森朋夫『堤中納言物語新釈』）、「これ以上様子のよい人もなかった」（寺本直彦・日本古典文学大系）、「これ以上のすばらしい方はまたとあるまいと思われた」（稲賀敬二・日本古典文学全集）のように、中納言の姿態を賞賛したもののという解釈が主流である。

涙のこぼれる様子は、あまり体裁のよいものではないのだが、中納言ほど涙にくれる様子までが他から見た目に美しい人も、（世間に）ないのである。（三谷栄一・鑑賞日本古典文学）

と、詳しく解説したものもある。

しかし、これらの訳文はいずれも「これ以上」「こんな」といった類の言葉を用いているけれども、それに当たる語句は原文にはない。この本文に基づくならば、

（涙のこぼれる様子といったら）「さまよき人」というのもいいものなのだった。

というのが素直な読み方であり、「これ以上」などを補って読むのはやや無理があるのではないか。

こうした直訳に近い形で解釈しているのが、新潮日本古典集成（塚原鉄雄）の、

恋慕にもだえて恰好のよい そんな人物もないことだった

という傍注である。「恋慕にもだえて」は独自に補ったものだが、場面の状況から判断するのはさほど困難でないだろう。

その他、比較的新しい注釈書では、「顔のよい男もだいなしであった」（三角洋一・講談社学術文庫）、「恋にはなりふりかまわずの有様であった」（稲賀敬二・新編日本古典文学全集）等の解釈が見られる。いずれも意識きみであるが、中納言のぶざまな様をいうとする方向では一致している。

しかし、近年のこのような傾向に対し、「この一節を「立派な男がだいなし」と中納言が醜態を晒したように解する説もあるが、「これほどすばらしい人はいないのだった。」と語り手は褒めあげているのである」という反論も消えない。確かに、主人公の理想性を絶賛するこの物語の全体的な色調からすると、中納言のみともなさを語り手がわざわざ指摘することに違和感をおぼえるのも、また道理である。

醜態という方向で解釈する諸注釈は、「恋の山には孔子のたふれ」（『源氏物語』胡蝶・四―四二頁）、「さかしき人かしこき人なく、乱るることこそあらめ」（『夜の寝覚』巻

一・一〇九頁」といった例を参考に挙げ、「さまよき人もなかりける」もこれに類する一種の慣用句か、と推測している。中でも古典集成の頭注には、

前文で、女性に讚美景仰された中納言が、恋慕する姫宮には、醜態を露呈する。対比して、慕情の深刻かつ切実なことを察知させる。理想的な男性の人間的情味である。

とあり、必ずしも主人公の理想性を否定する表現とはとらえていない。

恋のためには誰しも理性を失うことがあるという言い回しは、『源氏物語』では、

かかる筋は、まめ人の乱るるをりもあるを、(夕顔・一一三七頁)

女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るる例ありける。(梅枝・四一二七三頁)

さかしき人も、女の筋には乱るる例あるを、(藤裏葉・四一二九一頁)

と、たびたび繰り返される。主人公の光源氏についても、絶命状態から回復した紫の上が五戒を授かる場面で、

人わるく御かたはらに添ひみて、涙おしのごひたまひつつ、仏を諸心に念じきこえたまふさま、世にかしこくおはする人も、いとかく御心まどふことにあたりて

は、えしづめたまはぬわざなりけり。(若菜下・五一二二二頁)

と、紫の上のそばから離れようとしないう一見ぶざまな様子

が、紫の上を案ずる思いの切実さの現れとされている。
「さまよき人もなかりける」もこれらの例と発想の基盤を同じくし、中納言の恋心の深さを強調しているという見解には、基本的に賛同する。ただし、参考となる慣用句的表現では「かしこき人」やそれに近い意味の言葉が使われることが多く、「さまよき人」の先例がないことはやや気にかかる。「さまよき人」という表現の源泉は別にあるのではないか。それを見出すことによって、主人公の人物造型にも関わる、この表現の意図がより明らかになるのではないか。章を改めて論じたい。

二 夕霧巻・総角巻の「さまよし」

『逢坂越えぬ』の後半、中納言が宮に接近する場面の描写に、『源氏物語』のいくつかの場面からの影響が見られることは、早くから指摘されてきた。特に、男君が女君のもとで一夜を過ごしながら何事もなく終わったという点で影響関係が顕著なのは、夕霧が小野の山荘で落葉宮に迫る場面(夕霧巻)と、八宮の喪中に薫が宇治大君に近づく場面(総角巻)である。⁶ 表現上の類似が見られる箇所を一、

二例挙げてみると、たとえば、中納言が仲介役の女房に「やをらつづきて入りぬ」(四三九頁)というところは、

御消息聞こえ伝へにゐざり入る人の蔭につきて入りたまひぬ。(夕霧・六二二〇頁)

という夕霧の行動と酷似する。また、中納言が宮に対して無体な振舞いはしないと訴える、

身のほど知らず、なめげには、よも御覧ぜられじ。

(四四〇頁)

という台詞は、こうした状況における常套文句ではあるが、夕霧・薫も同様の趣旨のことを述べている。

これより馴れ過ぎたることは、さらに御心ゆるされでは御覧ぜられじ。(夕霧・六一二二頁)

御心破らじと思ひそめてはべれば、人はかくしもおしはかり思ふまじかめれど、世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや。(総角・七一二二頁)

さらに、右に挙げた薫の発言のうち、「人はかくしもおしはかり思ふまじかめれど」という部分は、中納言の「人はかくしも思ひはべらじ」(四四一頁)という台詞に似る。これらをはじめとして、夕霧巻・総角巻との間に類似点の多いことは、先行研究において詳しく検証されてきた。しかしながら、両巻で男君たちの態度が「さまよし」と形容されている点は、特に注目されてこなかったように思う。

夕霧巻には二例見られる。一例目は、夕霧が落葉宮の部屋に侵入した直後である。

宮はいとむくつけうなりたまうて、北の御障子の外にゐざり出でさせたまふを、いとようたどりて、ひきとどめたてまつりつ。御身は入り果てたまへれど、御衣の裾の残りにて、障子は、あなたより鎖すべきかたなりければ、引きたてさして、水のやうにわななきおはす。人々もあきれて、：「いとあさましう、思たまへ寄らざりける御心のほどになむ」と、泣きぬばかりに聞こゆれど、「かばかりにてさぶらはむが、人よりけにうとましう、めざましうおぼさるべきにやは。数ならずとも、御耳馴れぬる年月も重なりぬらむ」とて、いとのとやかにさまよくもてしづめて、思ふことを聞こえ知らせたまふ。(夕霧・六一二〇～二一頁)

気配を察し部屋から逃れ出ようとする落葉宮を、夕霧が引き留めた。落葉宮は震えおののき、女房たちも困惑するのに対し、夕霧は穏やかに「さまよく」落ち着いた態度で胸中の思いを語っている。

もう一例は、そのまま時間が経って明け方近くになった頃、やはり夕霧は「さまよう」穏やかに、亡き柏木のことなどを落葉宮に語りかけている。

故君の御こともすこし聞こえ出でて、さまよふのどや

かなる物語をぞ聞こえたまふ。(夕霧・六―二四頁)

総角巻の例は、大君に接近した薫が、大君の「言ふかひなく憂しと思ひて泣きたまふ御けしき」を見て「いといとほし」く思い、「おのづから心ゆるびしたまふをり」を待とうと思ひ直すところである。

わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへきこえたまふ。(総角・七―二二頁)

夕霧・薫ともに、女君からの拒絶に遭い、それ以上強引な行為に及ばず、「さまよく」語らいなだめている。問題の「さまよき人もなかりける」という表現の背景として、これらの例を第一に考えるべきではなかっただろうか。特に総角巻の例は、女君に対して「心苦し」と思った直後の男君の態度という点で、『逢坂越えぬ』との近似性が高い。

『逢坂越えぬ』の後半部が夕霧巻・総角巻を模倣しているのは明らかだとしても、女君に拒まれた男君の反応には顕著な違いもある。端的にいえば、泣くか否かの違いである。涙で声をつまらせる『逢坂越えぬ』の中納言に対し、夕霧・薫には涙を流すという描写は見られない。

『源氏物語』には、登場人物が泣いている状況で「さまよし」という言葉の用いられた例が四箇所にある。

大将の君は、世をおほし続けることいとさまざまにて、泣きたまふさま、あはれに心深きものから、いとさま

よくなまめきたまへり。(葵・二―一〇七頁)

まことにいともの心細くおほゆれば、さまよきほどにおしのごひたまひて、(朝顔・三―二〇四頁)

「…今はとて別れはべりにしかど、なほこそあはれは残りはべるものなりけれ」とて、さまよくうち泣きたまふ。(若菜上・五―一一五頁)

堪へぬ涙をさまよくのごひ隠して、言多くもあらず、

(早蕨・七―一三六頁)

一例目と二例目は源氏、三例目は明石の方、四例目は薫の動作である。二例目と四例目に「のごふ」「隠す」という動詞があり、一例目も「あはれに心深き」から逆接的に続いていることを考えると、これらはみな悲しみにまかせて泣き崩れているわけではなく、溢れ出しそうになる涙を適度に抑えている状態であることが察せられる。滂沱と涙を流す様は、「さまよし」とは言われない。

「さまよし」は「体裁がよい」と現代語訳される語であるが、『源氏物語』をはじめとする王朝貴族の文学では、感情をありのままに出さず抑制された振舞いを、この言葉で形容することが多い。泣く様子以外の例も挙げておく。

次の一例目は玉鬘への慕情を口に出してしまいそうになるのをこらえる柏木、二例目は源氏の突然の来訪に驚きつつも動揺した素振りを見せない明石の方である。

この中将は、心の限り尽くして、思ふ筋にぞ、かかる
ついでにも、え忍び果つまじきこちすれど、さまよ
くもてなして、をさをさ心とけても掻きわたさず。

(篝火・四―一九頁)

久しうさしものぞきたまはぬに、おぼえなきをりなれ
ば、うちおどろかるれど、さまようけはひ心にくくも
てつけて、なほこそ人にはまさりたれ、と見たまふに
つけては、(幻・六―一三八頁)

「さまよし」の反対語である「さまあし」の用例を見て
も、「さまあしき御もてなし」(桐壺・一八頁)が、桐壺帝
による桐壺更衣への度を超した寵愛ぶりを意味するなど、
同様の傾向が窺える。また、落葉宮に思いを打ち明ける以
前の夕霧は、

(落葉宮の)容貌ぞいとまほにはえものしたまふまじ
けれど、いと見苦しうかたはらいなきほどにだにあら
ずは、などで、見る目により人をも思ひ飽き、また、
さるまじきに心をもまどはすべきぞ、さまあしや、

(柏木・五―三一五)

と、落葉宮を軽んじ女三宮への道ならぬ恋に理性を失った
柏木を「さまあし」と非難したり、

かやうなるあたりに、思ひのままなる好き心ある人は、
しづむることなくて、さまあしけはひをもあらはし、

さるまじき名をも立つるぞかし、など、思ひ続けつつ
掻き鳴らしたまふ。(横笛・五―三二六―七頁)

と、自分と違つて好き勝手に行動する好色な男であれば、
落葉宮のような女性への思いを抑えられず、「さまあしき」
振る舞いに及ぶであろうと想像したりしている。

『逢坂越えぬ』の中納言の、宮をなだめようとする言葉
も言い終わらないうちに涙がこぼれてしまうという態度は、
感情を抑制した振る舞いとは言えまい。この点からも、
「さまよき人もなかりける」を、「中納言の泣く姿はこの
上なく「さまよき人」であつた」という賛辞ととる解釈に
は、やはり従いがたいのである。

女君に拒まれるという状況も、最後まで実力行使に及ば
ないという結果も一致するものの、夕霧・薫の節度ある振
る舞いと中納言の態度とは対照的である。「さまよき人も
なかりける」という一節は、夕霧巻や総角巻の類似の場面
を前提に、「こういつた状況では、あの夕霧や薫のように
「さまよき人」というのも実際いないものだったのね」と、
夕霧・薫との差異を読者に意識させる表現だったのではな
からうか。

三 物語前半部の主人公

ここで少し視点を変えて、『逢坂越えぬ』の前半部にお

ける主人公に目を向けた。前半の根合の場面において、中納言はまさに「さまよき人」という印象を与えるように描写されていると思われるのである。まず、やや長くなるが、根合の準備段階から当日まで（四三二～五頁）の流れを確認しておこう。

五月三日、中宮のもとを訪れた中納言は、翌々日に根合の行事が計画されていることを知る。左右のどちらに付くかと女房たちから尋ねられた中納言は、「あやめも知らぬ身なれども、引き取りたまはむ方にこそは」——どちらでも誘っていただいた方にと、やや気のない返事をした。すると、左方の中心人物であるらしい小宰相の君という女房が、強引に中納言を左方に引き入れようとする。それに対して中納言は、「かう仰せらるる折も待りけるは」と、抗いもしないが積極的でもなく、言われるがままという風情で立ち去って行く。その様子は、「例の、つれなき御気色こそわびしけれ、かかる折は、うち乱れたまへかし」と女房たちに思わせるものだった。

一方、右方の女房たちは三位中将という貴公子を味方に誘う。中将は「ことにも侍らぬ」と二つ返事で引き受け、「心の思はむ限りこそは」と全面的な協力を約束した。右方の人々は、「さればこそ。この御心は、そこひ知らぬこひぢにもおり立ちたまひなむ」——中将ならば自ら深い泥

地に下り立つほどの努力をして、みごとな根を提供してくれるはずだと期待する。

中将に比べ「さこそ心に入らぬけしき」だった中納言だが、二日後、根合の当日になると、「えも言はぬ根ども」を持って参内し、小宰相の君の局にやって来て、「心幼く取り寄せたまひしが心苦しさに、若々しき心地すれど、安積の沼をたづねてはべり。さりとて、負けたまはじ」と、「たのもしき」発言をする。「安積の沼」は陸奥の名所で、京都から二、三日で往復できる距離ではなく、ましてや中納言自身が赴いたわけではないのだが、それほどの苦勞をして立派な根を探してきたのだということを、冗談交じりに誇張して言っているであろう。

さて、後からやって来た三位中将は、「いづこや、いたう暮れぬほどぞよからむ。中納言は、まだ参らせたまはぬにや」と、「まだきに挑まじげ」な態度をあらわにするが、右方の女房少将の君に、「あな、をこがまし。御前こそ、御声のみ高くておそかめれ」、中納言様は早朝からいらして準備なさっているのに、と叱責される。そこへ、「この翁、ないたう挑みたまひそ。身も苦し」と言いながら、「同じ人とも見えず恥づかしげ」な様で中納言が姿を現す。自らを「翁」と呼ぶのもまた冗談である。

根合がはじまる。左右それぞれの方人となった殿上人た

ちはいずれ劣らぬ根を提出するが、中納言が手を加えた左方のものは「なほなまめかしき」風情がまさっていた。勝負は引き分けかと思われたが、最後に取り出された左方の根が「さらに心およぶべうもあらず」というものだった。

勝利を確信した左方の人々が「したり顔に心地よげ」なのに対し、三位中将は負けたショックのあまりか、「いはむかたなくまぼり居たまへり」という状態だったという。

以上、対抗議識をむき出しにする三位中将に対し、悠揚たる中納言という対比の構図は見やすい。中納言も当初の「つれなき御気色」からは意外なほど、勝利に向けて着々と準備してきたようだが、「さりとて、負けたまはじ」と

いう発言から察するに、それも自分が勝ちたいからというよりは、自分を味方に引き入れてくれた左方女房たちのためなのであろう。冗談を並べるのも余裕の現れと見られる。このような、主人公と、主人公に対抗議識を燃やすライバルという構図の先蹤として、薫と匂宮が挙げられることもあるが、実際に勝ち負けを競う場で勝利への執着度に差がある点、最終的に主人公側が圧勝する点では、『源氏物語』の絵合巻における源氏と頭中将の関係の方がより近いであろう¹⁰。

そして、闘争心をあらわにしない中納言のこうした態度は、「挑ましげ」な様子を隠さない三位中将と対比した時、

「さまよき人」という印象を与えないであろうか。もつとも、根合の場面に「さまよし」という言葉自体が使われているわけではない。しかし、根合に続いて行われた歌合の場面でも、中納言の悠然たる様は強調され続ける。ただしこれも解釈に問題があると思われる箇所なので、その検討からはじめたい。本文は以下のようである。

根合はてて、歌の折になりぬ。左の講師左中弁、右のは四位少将、読みあぐるほど、小宰相の君など、いかに心つくすらむと見えたり。「四位少将、いかに、臆すや」と、あいなう、中納言後見たまふほど、ねたげなり。(四三五頁)

問題は、傍線部「ねたげなり」を含む一文である。従来の注釈では、「四位少将、いかに、臆すや」を右の講師四位少将に対する右方方人の声援ととり、中納言が左方を「後見」しているのを右方がねたましく思っているようだと解釈する。しかしその場合、「あいなう」がどこにかかるとのかがわかりにくい。文の構造上、「後見たまふ」「ねたげなり」のどちらかにかかると見るしかないが、「あいなし」は本来、不釣り合いなさま、筋違いなさまという語である。左方に属する中納言が左方を「後見」するのは当然であって、「あいなう」と言うべきことではない。また、宮中の寵児である中納言が左方に属していることを、相手

方がねたましく思ったとしても、あながち筋違いとはいえない。そういうわけで、従来の解釈では「あいなう」をうまく処理することができず、「このあたり、文脈曖昧」（新日本古典文学大系脚注）とされることもあった。

しかしこの問題は、「四位少将、いかに、臆すや」を中納言の発言とすれば解決するであろう。白熱した勝負の雰囲気気後れしたか、なかなか歌を読み上げるのでない四位少将を、中納言が励ましているのである。つまり、中納言が「後見」しているのは左方ではなく右方である。その場合「あいなう」は、左方の方人である中納言が右方を応援することについて、筋違いだといっていることになる。このように解釈するならば、「いかに、臆すや」という発言を受ける引用の「と」も、「後見たまふ」に続いてゆくことになり、文脈上、より自然である。

もちろん、左方の中納言が右方を応援するというのは、ふつうではない。それはやはり中納言の、勝負にこだわらない、あるいは勝利を確信しているがゆえに自陣をあえて最前する必要はないという、余裕の現れと見るべきであろう。そうした中納言の態度が「ねたげ」なのである。

ここでの「ねたげ」は、「ねたましくなるほど相手がすぐれている、優位にある」という意味での用法であろう。例によって『源氏物語』からいくつか挙げてみる。たとえば

ば、頭中将が夕霧に雲居雁との結婚を許したことを知った源氏が、頭中将が見れば悔しく思うに違いないほど勝ち誇った態度をとる場面。

「……さも進みものしたまはばこそは、過ぎにしかたの興なかりし恨みも解けめ」とのたまふ。御心おごり、こよなうねたげなり。（藤裏葉・四―二八三頁）

また、紅梅巻では、紅梅大納言が次女を匂宮に縁づけることを目論んで歌を贈ったのに対し、大納言の継娘の方に関心のある匂宮はそつけない返事をする。その返事を見た大納言が、「ねたげにもものたまへるかな」（紅梅・六一―一九三頁）という感想を漏らしている。こちらから進んで縁談を申し込んだのに相手は無関心という、心理的優位に立っている様が「ねたげ」なのである。

特に注目すべきは、「ねたげ」と「さまよし」が並列して用いられる、竹河巻の例である。玉鬘の大君が冷泉院に興入れすることが決まった後、薫が贈った文を、大君に熱心に求婚していた蔵人少将が奪い取って読む、という場面である。

そこはかとなくて、ただ世をうらめしげにかすめたり。
つれなくて過ぐる月日をかぞへつつものうらめし
き暮の春かな

人はかうこそのどやかに、さまよくねたげなめれ、わ

がいと人笑はれなる心いられを、かたへは目馴れて、
あなづりそめられにたる、と思ふも、胸痛ければ、

(竹河・六―二二―三頁)

薫の歌は、大君への直接の恨み言ではなく、月日が過ぎて大君の興入れの日が近づくのが恨めしいという、穏やかなものであった。一方の蔵人少将はといえば、もともと「ゆるしたまはずは、盗みも取りつべく、むくつけきまで」(二〇―二三頁)大君に執着しており、大君の院参決定後は「死ぬばかり」(二二―一頁)思い詰めていた。その蔵人少将の目には、感情を露骨に表さない薫の「さまよく」のんびりとした態度は、誠に「ねたげ」に映ったに違いない。

この例は、感情を表に出さない体裁のよい振る舞いが、切迫した感情に支配されている相手には心理的余裕と受け止められるという点で、「さまよし」と「ねたげ」という二つの語に親和性があることを示している。『逢坂越えぬ』の作者が竹河巻のこの場面から何らかの影響を受けたか、その証明は今のところできないけれども、周囲が勝敗に夢中になっている中、一人超然とした面持ちで、劣勢に立つ敵方にも配慮を忘れない中納言の態度は、「ねたげ」に見えるほど「さまよし」ものだったといつてよいだろう。

もつとも、「四位少将、いかに、臆すや」という中納言

の発言は、励ましのように見えつつ、四位少将にさらなるプレッシャーをかけて足を引っ張りかねないものであり、中納言の本心はむしろそちらにあったかもしれない。そうであっても(そうであれば尚更)、建前上はあくまでも右方を「後見」とするという体裁をとっている以上、余裕綽々たる小憎らしい態度と、右方の人々には見えただけである。

このように、物語前半では「さまよし」という言葉そのものは用いられないけれども、根合の勝負の場における中納言の態度は、「ねたげ」に見えるほど「さまよし」振る舞いという印象を残すものであった。こうした前半部を受けての「さまよき人もなかりける」なのである。前章のまとめと併せ、「さまよき人もなかりける」という表現によって語り手が伝えたいことを敷衍するならば、次のようになるのではないか。

根合の場ではあれほど「さまよく」振る舞っていた中納言ですら、恋い焦がれる相手の前ではみつともない姿をさらしてしまう。夕霧や薫のように、こうした時でも感情を制御できる「さまよき人」などというのは、実際この世にいないものだったのだ。

中納言の「醜態」を述べているには違いないが、逆に、ふだんはこの上なく「さまよき人」であることを言っていることにもなり、主人公贅美という物語全体の色調と、決

して矛盾するものではないと考える。

四 「さまよき人」 薫

以上、「さまよき人もなかりける」とは、一つには前半部における主人公の人物像との、また一つには夕霧や薫との対比においてなされた言であることを確認した。やや皮肉交じりに中納言の「醜態」を述べているには違いないが、その意図は、平常の態度を保てないほど宮への思慕が切実であることを強調するところにある。その点では、先に引いた古典集成頭注などの理解と大きく変わるものではない。ただし、『源氏物語』において、夕霧や薫の「さまよき」態度が女性側にどのように受け取られていたかを参照することによって、この表現の意図するところはより明確になるように思う。

まず夕霧の場合、落葉宮を引き留めて「さまよく」語りかける彼の言葉が相手の心を動かすことはなく、むしろ「世の中をむげにおぼし知らぬにしもあらじを」（夕霧・六一二三頁）というデリカシーのない発言によって、落葉宮を傷つけてさえいる。その後も夕霧の態度は、結婚の形式や体裁を重んじるあまり不誠実ともとられかねないもので、病床にあった落葉宮の母御息所に不信感を抱かせ、その死を早める一因ともなり、落葉宮をますます頑なにさせ

るという悪循環に陥ってゆく。本稿第二章の最後に引いたように、他人の「さまあしき」態度に批判的で、「さまよく」振る舞ったつもりは夕霧であったが、その結果は惨憺たるものであった。

一方、薫の場合は、「さまよく」、また「いとなつかしきさまして」語らいを続けた末、大君は「やうやう恐ろしきもなぐさみて」（総角・七一二五頁）いった、とある。少なくともこの時点では、大君に安心感を与え信頼を得たという点で、薫の「さまよき」態度は一定の効果を上げたとはいえるだろう。

ただし薫に関しては、他の「さまよし」の用例も見ておく必要がある。薫は『源氏物語』の中で「さまよし」という言葉が使われることの最も多い人物であり、すでに挙げた三例（竹河巻・総角巻・早蕨巻）のほかに、

下りて、霧のまぎれにさまよく歩み入りたまへるを、
（宿木・七一六八頁）

御前をあゆみわたたりて、西さまにおはするを、御簾のうちの人々は心ことに用意す。げにいと様よく限りなきもてなしにて、渡殿の方は、右の大殿の君たちなどゐて、もの言ふけはひすれば、妻戸の前にゐたまひて、
（蜻蛉・八一五二頁）

のように、日常の立ち居振る舞いが「さまよく」と形容さ

れることもある。また、次の例は、今や匂宮の妻となつてゐる中の君に、周囲に悟られぬようそれとなく恋心を打ち明ける場面である。

昔より思ひきこえしきまなどを、かの御耳ひとつには心得させながら、人はかたはにも聞くまじきさまに、さまよくめやすくぞ言ひなしたまふを、げにありがたき御心ばへにも、と聞きゐたりけり。(宿木・七一―一九頁)

その後、浮舟の物語がはじまると、匂宮との対照において「さまよし」と評されることが多くなる。

女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時の間も見ざらむに死ぬべし、とおぼしこがる人を、心ざし深しとは、かかるを言ふにやあらむ、と思ひ知らるるにも、(浮舟・八一―三三―四頁)

この人(薫)はた、いとけはひことに、心深く、なまめかしきさまして、久しかりつるほどのおこたりなどのたまふも、言多からず、恋しかなしとおりたたねど、常にあひ見ぬ恋の苦しさを、さまよきほどにうちのたまへる、いみじく言ふにはまさりて、いとあはれと人の思ひぬべきさまをしめたまへる人柄なり。(浮舟・八一―四五―六頁)

心のどかに、さまよくおはする人だに、かかる筋には、

身も苦しきことおのづからまじるを、宮はましてなぐさめかねたまひつつ、(蜻蛉・八一―一五七頁)

一例目では、浮舟が、「いとさまよう心にくき人」薫よりも、「時の間も見ざらむに死ぬべし、とおぼしこがる人」匂宮の方が愛情が深いように感じている。二例目は薫が久々に宇治を訪れた場面で、薫の「さまよきほどに」語る様が「いみじく言ふ」よりまさっていると思われる。「いみじく言ふ」実例としては、当然匂宮が連想されよう。三例目は、薫も匂宮もともに浮舟失踪を嘆く中、「心のどかに、さまよくおはする人」薫にもまして、匂宮の方が悲しみを癒しがたいという。これらの例のうち、「いとさまよう心にくき人」「心のどかに、さまよくおはする人」は、特定の動作についてはなく薫の一般的な人柄を定義したものであり、「さまよき人」という言い方にも近い。このように言われるのも『源氏物語』では薫だけである。

また、薫自身、自分の行いは「さまあしき」ものではないと主張したり、そのような態度を意識的に避けたりもしている。次の例は、匂宮と浮舟との仲を知った薫が、自分の中の君(対の御方)への思いを長年耐え忍んできたのに、と匂宮を非難する一節である。自分と中の君との関係は昔からの因縁があるのだから、今さら「さまあしき」というようなことではない。それでも、一線を越えてしまったら自

分の気が咎めて苦しむだろうから慎んできたのだ、という。対の御方の御ことを、いみじく思ひつつ、年ごろ過ぐすは、わが心の重さ、こよなかりけり、さるは、それは今はじめてさまあしかるべきほどにもあらず、もとのたよりにもよれるを、ただ心のうちの限あらわが、わがためも苦しかるべきによりこそ、思ひ憚るものをこなるわざなりけり、(浮舟・八―七六頁)

また、失踪した浮舟が横川僧都に匿われていることを伝え聞いた時には、「さまあしからず」探し当てることを考え、僧都に仲介を頼む際にも、あまり急ぎ立てるのは「さまあし」と感じて控えている。

住むらむ山里はいづこにかあらむ、いかにして、さまあしからず尋ね寄らむ、僧都に会ひてこそは、たしかなるありさまも聞きあはせなどして、ともかくも問ふべかめれ、など、ただこのことを起き臥しおぼす。

(手習・八―二五五頁)

いと心もとなけれど、なほなほと、うちつけに焦られむも、さまあしければ、さらば、とて帰りたまふ。

(夢浮橋・八―二六五頁)

これら、薫が「さまよき人」であることを印象づける記述の中で看過できないのは、浮舟巻の一つ目の例のように浮舟に対する「さまよき」態度が、勾宮に比べて愛情が薄

いように受け取られている例があることである。もつとも、そのすぐ次の例、浮舟が薫と対面した場面ではその評価が逆になっているので、一概にそれが薫の欠点だということもできない。

また、蜻蛉巻では、薫を「心のどかに、さまよくおはする人」と呼んでいた。この「(心)のどか」あるいは「のどやか」は、「さまよし」とともに用いられることの多い語である。¹²⁾感情を制御して体裁よく振る舞う様子は、切迫感がなく余裕を感じさせるという点で、ゆつたりとした穏やかさ、気長さに相通するのであろう。そして、薫が浮舟を宇治に住まわせたまま、「たとしへなくのどかにおぼしおきてて」(浮舟・八―一二頁)、あまり頻繁に訪れなかったことに対しては、「例の、のどけき過ぎたる心からなるべし」(同・一三頁)という批評的な草子地や、「さばかりあはれなる人を、さて置きて、心のどかに月日を待ちわびさすらむよ」(同・四三頁)という勾宮からの批判があり、薫自身、浮舟を失った後に、「うつつの世には、などかくしも思ひ入れず、のどかにて過ぐしけむ」(蜻蛉・八―一五頁)と反省している。一方、小野の山里に身を寄せた浮舟は、

はじめより、薄きながらものどやかにものしたまひし人は、このをりかのをりなど、思ひ出づるぞこよなか

りける。(手習・八―二二頁)

と、「のどやか」だった薫のことを匂宮にもまして回想しており、「のど(や)か」さが薫の美点であることもまた事実である。

このように、「さまよし」「のど(や)か」とともに、薫の長所でもあり短所でもあるわけだが、短所として見る立場は、後世の読者による次のような薫評につながってゆくであろう。

さはあれど、け近くまめまめしげなる方は、おくれた人によ。浮舟の君、巢守の中の君などの、兵部卿宮には思ひおとしはべるこそ口惜しけれ。(『無名草子』

二〇二頁)

ここでの「まめまめしげ」は、「女性に対する熱心さという」(新編全集頭注)と理解されている。女君への誠意、真心があまり感じられない薫の姿勢ゆえに、浮舟や「巢守の中の君」⁽¹³⁾によって匂宮よりも低く見られていたのは残念だ、というのである。

よく知られるように『無名草子』の主たる語り手は薫眞肩であり、「薫大將、はじめより終はりまで、さらでもと思ふふし一つ見えず、返す返すめでたき人なんめり」「すべて、物語の中にも、まして現の人の中にも、昔も今も、かばかりの人はありがたくこそ」と、最大の賛辞を与えて

いる。右に引用したのは、その語り手に対して別の人が唱えた異論である。語り手はすぐに、それは薫の咎ではなく、女側の「せめて色なる心のさま」(二〇三頁)がよくないのだと反論しているの、否定するために持ち出された異論という印象は否めない。だがそれにしても、無視するわけにはいかない、論破するだけの価値のある異論だったのである。

『無名草子』は『逢坂越えぬ』の成立より百五十年も後のものではあるが、『源氏物語』の作品中に薫への批判とものれる記述がある以上、似たような感想を抱く読者は当然早くからいたはずである。『逢坂越えぬ』の主人公が、基本的に「薫型」の男君として造型されつつ、恋する相手の前では「さまよき人」から逸脱して思いの丈をさらけ出してしまふという、薫にはたえて見られない態度をとるのは、こうした薫の欠点を修正するという意味もあつたのではなからうか。その場合、「さまよき人もなかりける」とは、主人公の「人間的情味」をやや醒めた目で描き出しつつ、それが夕霧はもちろん薫をも上回る魅力であることを、暗に述べていることになるだろう。

おわりに

『逢坂越えぬ』の作者小式部と同じく六条斎院物語合に

物語を提出した、宣旨という名の女房は、後年、『狭衣物語』を執筆したとされる。その『狭衣物語』の主人公狭衣は、源氏宮へのかなわぬ恋になずみ、他の女君たちとの関係も「心のどか」に構えているうちに次々と破綻して、そのたびに厭世観を深めてゆくという、典型的な「薰型」の男君である。

しかしその狭衣にも、『逢坂越えぬ』の中納言と同様、女君に思いを訴える言葉の端から涙にくれるという「醜態」の描かれることがある。たとえば、狭衣が源氏宮にはじめて恋心を打ち明ける場面には、

よしさらば昔の跡を尋ね見よ我のみ惑ふ恋の道かは

ともえ言ひやらず、涙のほろほろとこぼるるを、あやしとおぼす。御手をさへ取りて、袖の柵堰きやらぬけしきなるに、宮、いと恐ろしうなりたまひて、とらへたまへる腕にやがてうつぶし伏したまへるけはひ、いといみじう恐ろしと思したるも、ただうち見たてまつるよりも、近まさりはいま少し類なくおぼえたまふに
(巻一・五八〜九頁)

とある。また、物語後半、かつて狭衣との間に秘密の子を出産し今や出家の身となっている女二宮の御堂に、狭衣が忍び込む場面でも同様である。

「…今ぞ心の中晴れて、年月の本意遂げはべりぬべう」とて、すべてまねぶべうもあらぬ事を、言ひもやらず、むせかへりたまふには、過ぎにし方のつらさも忘られて、千世経る末も傾きぬべけれど、宮は、夢にてだに、かばかりのけ近さは、または聞かじと思されしに、いともの恐ろしうて、いかにもいかにもえ動かしたまはぬを、(巻三・一七九〜八〇頁)

右の波線部は、諸注に指摘があるように、⁽¹⁵⁾

物をこそいはねの松も思ふらめ千代ふるすゑもかたぶきにけり(『小町集』五一番)

を踏まえ、不変・堅固なものの象徴である「岩根の松」の、千年の樹齢を経た梢でさえなびいてしまふに違いないほど、狭衣の訴えが感動的であることをいう。同趣の表現は『逢坂越えぬ』にも見られる。

なまめかしう、心深げに聞こえつづけたまふことどもは、奥のえびすも思ひ知りぬべし。(四三九頁)

『狭衣物語』には「さまよき人もなかりける」のような表現こそないものの、男君の涙でもって恋心の切実さを表そうとしている点では、『逢坂越えぬ』と軌を一にしている。⁽¹⁶⁾

『狭衣物語』の主人公が「薰型」であることについて、狭衣はいわば「もうひとりの薰」であり、その主人公によ

って、『狭衣物語』は『源氏物語』正篇の世界を継承し光源氏没後の世界を再構築しようとしている、という見方がある。¹⁷⁾「もうひとりの」新たな薫であるならば、薫に似ているばかりでなく異なる点、薫を凌駕する点が必要であろう。女君の前で涙にむせぶこのような姿も、薫との差異化であり、さらなる理想化の一つであつたのかもしれない。

しかし、第三者の目から見れば感動的なまでの真剣さで男君が掻き口説いても、肝心の女君たちは驚き怖れるばかりで、心を動かされることがない。その点でも『逢坂越えぬ』と『狭衣物語』は似ている。『源氏物語』若紫巻における源氏と藤壺の密会場面では、源氏の「むせかへりたまふさま」を「さすがにいみじ」と感じた藤壺が、思い乱れながらも歌を返していた（若紫・一―二二三頁）。そもそも逢瀬が成立したか否かが根本的に違うけれども、『逢坂越えぬ』の主人公や狭衣には、その程度の交情さえかなわない。¹⁸⁾『逢坂越えぬ』の末尾には、中納言がむなしく宮のもとから去ろうとする際の歌が置かれ、それに対する宮の反応は一切書かれないうまま幕を閉じるし、『狭衣物語』の先に引用した場面でも、狭衣の詠みかけた歌は一方通行に終わり、源氏宮と女二宮は声を発することすらない。

こうした女君たちの冷たい反応については、『逢坂越えぬ』の宮や『狭衣物語』の源氏宮を祿子内親王になぞらえ

ることにより、二つの物語が作られた斎院という場の必然として説明されている。¹⁹⁾しかし、男君の側から考えた時、なりふりかまわず切実な恋心を訴える様が人間的で魅力的であるとしても、そこまでしても女君の心を動かすことができない主人公が、主人公としての理想性を確保できるのか、という疑問は改めて起こってくるだろう。薫の場合、大君との間の一線を越えられなかったのも、浮舟の心をつなぎとめることができなかったのも、良くも悪しくも彼が「さまよき人」だったからという理由で納得できるのに対し、これら男君たちの人物像は破綻寸前ではないか。少なくとも『逢坂越えぬ』に限っていうならば、「逢坂越えぬ」というテーマを大前提としつつ、薫以上の魅力を主人公に与えようとしたがために、一種の自家撞着を起こしてしまったというべきだろうか。そして、こうした主人公がかかるうじて理想性を保っていられるのは、『逢坂越えぬ』のような短編なればこそだったのかもしれない。²⁰⁾

※本文の引用は、『源氏物語』は新潮日本古典集成により、それ以外の散文作品は新編日本古典文学全集による。和歌の引用は『新編国歌大観』による。作品本文の引用における括弧内の注記は、すべて稿者が施したものである。

(1) 井上新子「へ賀の物語」の出現——『逢坂越えぬ権中納言』と藤原頼通の周辺——（『堤中納言物語の言語空間——織りなされる言葉と時代——』翰林書房、二〇一六年）。

(2) 佐伯梅友・藤森朋夫『堤中納言物語新釈』には、「上に「かく」とか「かかるとかあると、わかりがよい」という注がある。なお、土岐武治『堤中納言物語校本及び総索引』（風間書房、一九七〇年）によると、「人もなかりける」の部分に「人なりける」という異文があるが、ごく少数の伝本に限られており信用しがたい。ほかに「人そなかりける」「人となかりける」「人もなめける」という異文も見られるが、いずれも誤写の可能性が高い。

(3) ただし、後に掲出する『源氏物語』の用例からもわかるように、「さまよし」は人の容姿というより主として態度や振る舞いについていう語であるため、「顔のよい男」という訳は適切でなからう。

(4) 神野藤昭夫「サロソ文学としての『逢坂越えぬ権中納言』」（『散逸した物語世界と物語史』若草書房、一九九八年）。

(5) 亀田夕佳氏も、主人公は「どこか親しみのある人物として造型されたのではないか」という立場から、この一節について「人間味あふれる情けなさを加味された」ものにとらえている（『根合』の男君——『堤中納言物語』『逢坂越えぬ権中納言』試論——、『名古屋大学国語国文学』第九十七号、二〇〇五年十二月）。

(6) 夕霧巻については寺本直彦「『逢坂越えぬ権中納言』と狭衣物語宰相中将妹君物語と夕霧の巻と」（『永山勇博士退官記念国語国文学論集』風間書房、一九七四年）、総角巻につい

ては倉野憲司「逢坂越えぬ権中納言——源語から抜け出た薫君——」（『文学』第七巻第四号、一九三九年四月）、鈴木一雄『堤中納言物語序説』（桜楓社、一九八〇年）などで検証されている。

(7) 少し後のことになるが、夕霧は、いつまでも心を開いてくれない落葉宮に対して、「さらがへりて懸想だち、涙を尽くしかかづらはむも、いとうひうひしかるべし」（夕霧・六一七—二頁）と考えている。

(8) 「逢坂越えぬ」という題名は、逢坂の関を越えた遥か東国にある安積の沼まで、中納言が実際には行っていないことの寓意も含むとされる（井上新子『逢坂越えぬ権中納言』題名考——「安積の沼」と「淀野」をめぐって——、注（1）著書）。

(9) ここでやって来た人物を諸本「右少将」と表記しているが、多くの注釈書は「少」を「中」の誤写と見て、「右方の三位中将」の意味と解釈している。それに従う。

(10) 最後に左方の提出した根によって根合の勝負が決する点や、勝負の後の合奏の場で人々の心の融和がはかられる点に『源氏物語』絵合巻の影響が見られることは、すでに指摘がある（『古典全集頭注』注（5）亀田論文）。

(11) とはいえ、中納言が特に腹黒いというわけではなく、あくまでも遊戯の場での、冗談の延長のようなものである。なお、この場における中納言の姿勢は、統いて記される歌合の和歌三首の解釈や詠み手の問題とも関わってくると思われるが、それについてはまた別の機会に考えたい。

(12) 本稿にこれまで挙げた用例文では破線部で示した。『源氏物語』にはほかに、「なほしばし、かくて待ちきこえさせた

まはむぞ、のどやかにさまよかるべき」(浮舟・八―二五頁)という例がある。また、「さまよし」とは少し離れた場所だが、総角巻で薫が大君に接近する場面にも、「せめてのどかに思ひなしたまふ」(総角・七―二三頁)とある。他作品では、「様よう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどかに、おちるぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしく心やすけれ」(紫式部日記・二〇六頁)、「いと様よくのどやかに歩みおはして」(夜の寝覚・卷一・八四頁)など。

- (13) 宇治中の君を指すとする説と、散逸した巢守巻の登場人物とする説とがある。

- (14) ただし薫も、死にゆく大君を前にした時には、「さくりもよよと泣きたまふ」(総角巻・七―一〇〇頁)、「いよいよせきとどめがたくて、ゆゆしう、かく心細げに思ふとは見えじと、つつみたまへど、声も惜しまれず」(同・一〇七頁)、「足摺もしつべく、人のかたくなしと見むこともおぼえず」(同・一〇九頁)と、「さまよき」態度を保つことができない。

- (15) ただし、「千世経る末も」を諸注が「長い将来をも」のように解釈している点は、踏まえた和歌の歌意により訂正した。

- (16) 『逢坂越えぬ』から『狭衣物語』卷三の当該場面への影響関係については、土岐武治『堤中納言物語の注釈的研究』(風間書房、一九七六年)に指摘がある。また、注(6)寺本論文は、『狭衣物語』卷四にも『逢坂越えぬ』後半部に類似する場面があることを指摘する。

- (17) 後藤康文「もうひとりの薫——『狭衣物語』試論——」(『語文研究』第六十八号、一九八九年十二月)。

- (18) 大森純子氏は、『逢坂越えぬ』後半部と『源氏物語』総角

巻との類似を前提に、薫と大君との間には成立した語らいが、『逢坂越えぬ』では実現していないことを指摘する(『逢坂越えぬ権中納言』『体系物語文学史』第三巻、有精堂、一九八三年)。

- (19) 神野藤昭夫「齋院文化圏と物語の変容」(注(4)著書)。

- (20) 本稿と論点は異なるが、安達敬子氏も薫との比較において狭衣の人物造型を論じ、「このような人物では、長編の物語世界を最後まで領導してゆくのはきわめて難しく、物語を続けてゆくために伝奇的要素が導入されたと述べている」(『後継者の蹉跌——狭衣大将——』『源氏世界の文学』清文堂出版、二〇〇五年)。